

原田先生と水草と私

太田敬久

10月15日夜、原田先生が亡くなられたという電話があり、これにはほんとうに驚いた。今年5月に東京でおめにかかったとき、昨年よりやや年をとられた感じで足の具合が少しお悪いようだったが、まだまだお元気で、こんなことになるとは全く考えられなかったのに……。

原田先生との最初の出あいは昭和25年秋、先生が名古屋大学へ助教授として赴任して来られたときだった。胃の手術のあとで体力がまだ回復しておられないのに、私たち植物学専攻の2年生、たった3人のためにすぐ授業を始められた。「植物細胞学特論」という科目だったと思う。先生は水草(沼生目 Helobiae)の核型の専門家として、すでに日本で(どころか世界でも)並ぶ者がない大家であったが、この細胞学特論は、説明の例として種々の水草の細胞が登場するものの、細胞の形をさめる要因、細胞の形がどのようにして植物体全体の形を構築しているか、つまりは生物の形はどんなしくみでできるか、という現代生物学最大の謎につながる内容である。当時のどんな本にも出ていない新鮮な問題提起だった。

その後、先生の指導のもとに優秀なお弟子さんたちが、次から次へ植物(とくにシダの前葉体を材料にして)の形態形成や性分化の研究にとり組み、名大はこの分野の一大センターとなった。私は、厳密に言えば原田先生の直弟子ではなく、島村先生のもとで細胞分裂の仕事をしたのだが、同じ研究室の中で原田先生からもじつに多くのことを教わり、大きな影響を受けた。結局、私の研究も細胞分裂と形態形成を結びつけようとする方向に進んだ。

先生はこのように形態形成の研究を指導されるとともに、ご自分の水草の研究にも精力的に励んでおられた。

東大時代に作ってあったパラフィンケーキを次々にミクロトームで切って染めて、おそらく2000枚以上のプレパラートをあつというまに作られ、それをかたっぱしから検鏡して、染色体をスケッチし写真を撮り……暑い夏、もちろんクーラーなどない木造の研究室で裸の上に白衣をひっかけた姿で、毎日毎夜がんばっておられたのがついこの間のような気がする(じつは40年も昔)。

私の当時のテーマ——細胞分裂あるいは細胞の形(とくに花粉の)の研究材料として、水草にはまことに多彩なすばらしいものがあることも原田先生から教えられた。例えば、ミズオオバコ・セキショウモ・クロモなどの花粉母細胞とか、アマモの糸のように細長い花粉とか。伊勢湾台風の前年、先生といっしょに三重県長島町へミズオオバコやセキショウモを取りに行ったこともある。私と水草との「おつきあい」は、原田先生を通じて、このようなものだった。現在、これらの水草は日本の自然から失われつつあるようだが、実験用に水槽で栽培するのは案外やさしいかもしれない。現代の細胞生物学の材料としてもっと活用されてもいいと思う。

私は名大を卒業後10年間研究室にいてそのあと椋山女学園に移り、細胞分裂とも水草とも縁がうすくなってしまったが、原田先生との「おつきあい」は先生が北大・琉球大そして横浜の現在地に移られても続いた。つねに人の和を大切にされる先生からは、研究だけでなく「人生の先輩」としてもはかりしれない御指導を賜わった。44年間ほんとうにありがとうございました。

謹んで御冥福をお祈りいたします。

(椋山女学園大学)